

## 附 録 (四) 長崎医学略年表

- 永禄一〇年 (一五六七)  
 元龜二年 (一五七一)  
 天正八年 (一五八〇)  
 天正十二年 (一五八三)  
 寛永二年 (一六三四)  
 一五年 (一六三八)  
 一六年 (一六三九)  
 一八年 (一六四一)  
 正保三年 (一六四六)  
 慶安二年 (一六四九)  
 一 三年 (一六五〇)  
 承応二年 (一六五三)  
 一 三年 (一六五四)  
 寛文一年 (一六六一)  
 一 三年 (一六六三)
- Luis Dalmeida 長崎地方に布教、翌年まで滞在。  
 大村純忠、ポルトガル人に長崎を開港し、六町建を行なう。  
 長崎、イエズス会領となり「その後、天正一五年 (一五八七) まで、南蛮医学全盛期となった。  
 ミゼリコルディア、長崎に設立される。  
 長崎の出島、起工さる。  
 幕府、島原の乱に鑑み、天主教の禁を厳しくし、ポルトガル人との貿易を禁じ、追放する。  
 幕府、ポルトガル人の入国を禁じ、オランダ以外のヨーロッパ諸国との通商を禁ず。  
 平戸のオランダ商館を長崎の出島に移し、オランダ医学全盛期に入る。蘭館医 Jeuriaen Has-selingh 寛永年中、長崎の広瀬九左衛門藤原泰心、南蛮紅毛流の外科器械を製作。  
 蘭館医の他、一・二名のオランダ人が通詞の案内により町に出、薬草採集を許される。  
 蘭館医 Mathijs Crousen  
 オランダ特派大使の江戸参府に、医官 Caspar Schamberggen 随行。十ヶ月、江戸に滞留。  
 日本人四名、医術伝習のため、出島オランダ商館に出入を許される。  
 蘭館医 Hoffman  
 蘭館医 Hans Joan Stibin (Jan Stipel?)  
 向井元升、通詞を介し、蘭方医を伝習し、「紅毛流外科秘要」を撰述。  
 蘭館医 Johan Wunsch  
 蘭館医 Almans Katz (Hermanns Katz) 判田甫安 (後に嵐山姓)、就学。  
 蘭館医 Daniel Bush (Dannel Busch) & Hermanns Vischer

長崎医学略年表

寛文 六年 (一六六六)	蘭館医 Palm & Cornelis de Laver 杉本忠恵、幕府医官となる。
〳 七年 (一六六七)	蘭館医 Arnold Dirckz 瀬尾昌琢、就学、"外科心鏡集"を撰出。
〳 八年 (一六六八)	西玄甫、出島オランダ商館長より医術証明書を受く。
〳 一二年 (一六七二)	三月、幕府は絹綿織物・薬剤に供しない動植物・唐木・珊瑚等の輸入を禁止。
延宝 一年 (一六七三)	蘭館医 Steven
天和 二年 (一六八二)	蘭館医 Willem ten Rhyn 西玄甫、幕府医官となる。
貞享 二年 (一六八五)	出島商館長 Andries Cleyer (Andreas Cleyer) 来朝。植物学・医学をよくし、四年間滞在、一三六〇枚の日本植物図を製作。
〳 三年 (一六八六)	蘭館医 Georg Meister
元禄 一年 (一六八八)	蘭館医 Albert Croan 原三信、就学。
〳 三年 (一六九〇)	蘭館医 Willem Hoffman 檜林鎮山、就学、檜林流外科の祖となる。鎮山、"外科諸伎術書"を訳述。
〳 四年 (一六九二)	蘭館医 Engelbert Kämpfer 来朝、翌年、江戸参府。
〳 一五年 (一七〇二)	栗崎正羽、吉田自庵、村山自伯等、幕府医官となる。
宝永 三年 (一七〇六)	蘭館医 Pieter Kesteloot
享保 一年 (一七一六)	檜林鎮山、"紅毛外科宗伝"を撰了。
〳 五年 (一七二〇)	蘭館医 Willem Wagemans
〳 七年 (一七二二)	長崎に舶載する洋書中、キリスト教に関しないものの購読を許可。
〳 一二年 (一七二七)	蘭館医 Willem Katerlaar 徳川吉宗、通詞を介し、Ambroise Pare' の外科書につき質し、Stephanus Blankaart の外科書を購入。
〳 一四年 (一七二九)	蘭館医 David Drinkmann
〳 一六年 (一七三一)	蘭館医 Harbert Evers
	蘭館医 Hendrik Thompson

元文 一年（一七三六）  
 寛保 一年（一七四一）  
 延享 一年（一七四四）  
 〃 五年（一七四八）  
 寛延 一年（一八四八）  
 宝暦 八年（一七五八）  
 〃 九年（一七五九）  
 〃 一〇年（一七六〇）  
 〃 一二年（一七六二）  
 〃 一三年（一七六三）  
 明和 一年（一七六四）  
 〃 二年（一七六五）  
 〃 三年（一七六六）  
 〃 五年（一七六八）  
 〃 八年（一七七一）  
 安永 二年（一七七三）  
 〃 四年（一七七五）  
 天明 四年（一七八四）  
 〃 五年（一七八五）  
 寛政 四年（一七九二）

幕府、長崎奉行に命じ、サボン（石鹼）製法を伝習せしむ。

蘭館医 Filipp (Philipp) Pieter Musculus

清人、李仁山、長崎に来、人痘種痘法を伝う。

オランダ通詞の蘭書読解を奨励する。

蘭館医 David Evers (Evertz)

蘭館医 Cornelis Borstelman

蘭館医 Georg Rudolf Bauer

オランダ外科医ホウル、来朝。

吉雄耕牛、長崎の甚太郎にカテーテルを模造せしめる。

オランダ外科医 Cornelis Borstelman 来朝、江戸参府。

オランダ外科医 ホントノー、来朝。

平賀源内、江戸参府中の吉雄耕牛に就学。

蘭館医 Antony van Nieuwenhijse その江戸参府中、前野良沢、杉田玄白等、江戸の長崎屋に

訪う。

蘭館医 François de Haut

蘭館医 Ikarus Jacobus Halwijk

前野良沢、杉田玄白等、江戸参府中の吉雄耕牛を訪う。

蘭館医 Karl Peter Thunberg (Carolus Peterus Thunberg) 来朝、翌年、江戸参府、その

時、桂川甫周、中川淳庵、就学。

野村立栄、名古屋に蘭方医を弘める。

前野良沢、"和蘭訳釜"を著わす。大槻玄沢、長崎に遊学。

宇田川玄随、オランダの Johannes de Gorter (1689-1762) の内科書より "西説内科選要"を

訳出。

長崎医学略年表

寛政五年（一七九三）

大槻玄沢、杉田玄白の遺志をつぎ「瘍医新書」を完成。

蘭館医 Bernhard Keller 緒方春朝にトルコ式人痘種痘法を伝う。

〳 六年（一七九四）

桂川甫周、幕府医学館に外科を講ず。甫周、栗本瑞見、渋江長伯、大槻玄沢等と共に江戸参府中の Keller と対談、商館長 Hemmij より人頭（塑型）を貰う。

〳 一〇年（一七九八）

蘭館医 Herman (Hermannus) Letzke

〳 一二年（一八〇〇）

吉雄耕牛、歿す。

享和二年（一八〇二）

江戸参府中の Letzke と大槻盤水と対談。

〳 三年（一八〇三）

馬場佐十郎、オランダ商館長 Hendrik Doeff より牛痘法を聴く。

文化二年（一八〇五）

蘭館医 Johannes Feilke 翌年、新宮涼庭、就学。

〳 一一年（一八〇四）

蘭館医 Bateij (J. J. Plenck の門人) 翌年、杉田立卿、Plenck の「眼科新書」を訳出。

文政一年（一八一八）

新宮涼庭、京に蘭方医を弘む。蘭館医 Gerhart (Gerrit) Leendert Hagen 杉田立卿にコムカテートルを与う。

〳 三年（一八二〇）

蘭館医 J. F. van Overmeer Fischer

〳 五年（一八二二）

商館長 Jan Cock Blomhoff 蘭館医 Nikolaas Jullingh

〳 六年（一八二三）

蘭館医 Philipp Franz Balhasar von Siebold 来朝、翌年、鳴滝に塾を門き、医学、万有学を講義。岡研介、高野長英、戸塚静海等、就学。

〳 八年（一八二五）

Siebold の助手 Heinrich Bürger, Carolus Hubert de Villeneuve 来朝。

〳 一一年（一八二八）

江戸参府中の Siebold 牛痘を試む。高良斎、二宮敬作、石井宗謙、川原慶賀等を伴う。

〳 一二年（一八二九）

高橋景保、土生玄碩等、Siebold 事件に連坐、下獄。

天保一年（一八三〇）

伊東玄朴 (Siebold の門人)、江戸に蘭方医を弘める。

〳 二年（一八三一）

Siebold 追放され、日本を去る。蘭館医 J. F. van Overmeer Fischer 高野長英は江戸に、岡研介は大坂に開業。戸塚静海、外科を江戸に開業。伊東玄朴、鍋島藩医となる。

- 〳 三年（一八三二）
- 〳 六年（一八三五）
- 〳 七年（一八三六）
- 〳 八年（一八三七）
- 〳 九年（一八三八）
- 〳 一〇年（一八三九）
- 〳 一二年（一八四一）
- 〳 一四年（一八四三）
- 弘化 一年（一八四四）
- 〳 三年（一八四六）
- 嘉永 一年（一八四八）
- 〳 二年（一八四九）
- 〳 三年（一八五〇）
- 〳 六年（一八五三）
- 安政 二年（一八五五）

高野長英、“医源枢要”を出版、生理学書のはじめ。  
 伊東玄朴、Bischoff の内科書より“医療正始”を訳出。  
 佐藤泰然、林洞海ら長崎に遊学。泰然は、新任のオランダ商館長 Johannes Edewin Frederik Nieman に就学。  
 高良斎、大阪に蘭方眼科を開業。  
 大槻俊斎、長崎に遊学。  
 佐藤泰然、江戸に開業。高良斎、“驅微要方”を訳述。  
 蘭館医 Lischur 牛痘苗を齎らし、榎林宗建、実地に試みたが、善感せず。  
 新宮涼庭、京に順正書院を創立。  
 前年、江戸に帰った大槻俊斎、長崎の高島秋帆を介して牛痘苗を得、江戸浅草蔵前伊勢屋の児に接種、善感した。  
 佐藤泰然、下総佐倉に順天堂を創立。  
 商館長 Levijssohn オランダ国王の国書を幕府に呈し、開国を勧める。  
 榎林宗建、長崎に大成館を建立。  
 商館医 Otto G. J. Mohrke 来任、聴診器を舶載し、医学・気象学を教え、出島に気象観測所を設く。Vinna 製牛痘漿を齎したが、善感せず。  
 痘苗を再び取り寄せ、接種、善感し、榎林宗建、吉雄圭斎らこれを弘む。宗建は“牛痘小考”を著わしたほかに、佐賀藩に普及せしめる。  
 幕府、洋書訳述、流布を制限し、オランダ医術を禁じ、医書の刊行をも厳監、その後、その禁を緩める。  
 ロシア海軍提督 Putiatine 長崎に、アメリカ海軍提督 Perry 浦賀に入り、開港を求める。  
 商館医 J. K. van den Brock 渡来、医学・化学・物理学・測重・数学・石炭坑・鉄製造法などを講義。時に第一次海軍伝習始まり、その伝習所医官を兼任。

長崎医学略年表

安政四年（一八五八）

八月五日（6月22日）、オランダ海軍軍医 Johannes Iridius Cathalinus Pompe van Meerdervoort 第二次海軍伝習所医官として出島に上陸。九月二十六日（11月12日）、長崎奉行所西役所（現在の長崎県庁所在地）内において医学開講。松本良順、司馬凌海ら一二名（一四名とも）の学生、受講する。

この日を以て長崎大学医学部の開学記念日としている。

その後、大村町一番地口（現在の長崎地方裁判所所在地）に移り、大村町医学伝習所と呼ばれる。Pompe 松本良順を介し、病院設立を要請し、翌年、長崎奉行岡部駿河守長常の援助のもとに幕府に対し、病院設立を懇請。

五年（一八五八）

六月三日（7月30日）、日米修好通商条約調印。

七月八日（8月16日）、蘭方医の学習を公許。同月一〇日（8月18日）、日蘭修好通商条約締結。出島のオランダ商館廃止され、領事館となる。Siebold 追放令解かれる。

この年、コレラ大流行、Pompe その治療に尽力す。

六年（一八五九）

幕府、Pompe の建議を容れ、病院設立を許可す。

七月八日（8月9日）、Siebold 再渡来。

八月十三日（6月6日）、Pompe 屍体解剖。

Pompe の懇請に基く養成所設立準備始められ、閏三月三日（4月23日）、病院取建掛を任ず。設計は B. D. van Trojen 四月八日（5月28日）、養成所と名称定まる。

Pompe 江戸に参府。

九月より長崎稲佐において遊女の検梅施行。

五月より養生所地統きに医学所設立し始む。

文久一年（一八六一）

七月一日（8月6日）、養生所落成。八月一六日（9月20日）養生所開院式、医学所開校式舉行。養生所規則制定。翌日より診療開始。養生所教頭 Pompe 同所頭取、松本良順。

二年（一八六二）

九月一〇日（11月1日）、Pompe 帰国す。門人は松本良順ら約一五〇余名。

養生所教頭 Antonius François Bauduin と交代。緒方洪哉（後の維準）、戸塚文海、竹内玄康、伊東玄伯（後の栄）、林研海（後の紀）、長与専斎ら約一〇〇〇名、就学。

養生所頭取に八木称平、戸塚文海、相良知安、高橋正純ら相次いで就任。

八月、分析究理所設立、同所教授 Wouter Koenraad Gratama 招聘。

四月上旬、長崎奉行服部左衛門佐常純、養生所を精得館と改称。

四月（5月）、Gratama 着任。

七月、C. G. van Mansvelt 来朝、精得館教頭となる。頭取に竹内正信、池田謙斎ら相次いで就任。

一〇月一四日（11月9日）、徳川慶喜、大政奉還。

一月一五日（2月8日）、長崎奉行河津伊豆守祐邦、江戸へ向う。その後、池田謙斎ら、上海經由、江戸へ向う。

二月二日（2月24日）、吉雄主斎、精得館執事兼俗事取締に就任。

二月一五日（3月3日）、九州鎮撫総督、沢主水正宣嘉、長崎に着き、諸官公衙の改称、人員整理を行なう。

五月二日（6月21日）、長与専斎、精得館学園医師に撰ばれる。

八月上旬、井上聞多（後の薫）、沢宣嘉の精得館改革の意向を伝う。

一〇月一七日（11月30日）、精得館を長崎府医学校と改称、校長に長与専斎、教頭に Mansvelt を任じ、大学・小学の二科を設け、医学校規則、病院規則、薬局掟などを制定。

二月、Anton Johannes Cornelius Geerts 招かれ、幾何・物理・化学等の学科を担当。

六月一五日（7月23日）、大学校設立。

七月九日（8月16日）、長崎府が長崎県と改称された旨、長崎に布達。この後、長崎府医学校は長崎県病院医学校と改称。

二月二八日（3月29日）、長崎県病院、大学所轄となる。この月、大学規則、改正さる。

元治 一年（一八六四）

慶応 一年（一八六五）

〳 二年（一八六六）

〳 三年（一八六七）

明治 一年（一八六八）

〳 二年（一八六九）

〳 三年（一八七〇）

長崎医学略年表

明治四年（一八七二）

二月、K. W. S. B. van Leeuwen van Duiverbode 来朝、教頭となる。

七月一八日（6月2日）、大学廃止、文部省設置。

十一月一四日（12月25日）、長崎県病院を文部省所管とし、翌月に入り、長崎医学校と改称。

十二月五日（<sup>1872</sup>1872年1月14日）、坂井直常、欧米視察に赴いた長与専斎の後任校長として長崎出張を命ぜらる。

五年（一八七二）

八月三日（9月5日）、学制頒布。八大学区制。同月一八日（9月20日）付、文部省布達、第一九号を以て、長崎医学校を第六大学区醫学校と改称。

六年（一八七三）

1月28日、Geert, 薬品取締を長崎県に要請。

4月10日、八大学区を七大学区に改め、第五大学区醫学校と改称。前年より相次いで、プロシヤ人 Simmons, J. A. Leppen を雇ひ、ドイツ語、ラテン語を教授。

七年（一八七四）

5月、第五大学区醫学校を長崎医学校と改称。

8月27日、長谷川泰、長崎医学校長に就任、7月28日、着任。

10月12日、征台の役に当り、長崎病院を公兵員病院とすべく、長崎医学校を廃止。学生は東京医学校に転学、長谷川泰を被免。

11月1日、長崎医学校及び病院は蕃地事務（支）局病院となる。

4月31日、征台の役の終結により蕃地事務（支）局病院、長崎県の所轄に入り、吉田健康、同病院に引続き勤務を命ぜらる。

5月1日、Leeuwen 県令に約定書を送る。

5月14日、吉田健康、長崎病院長となる。このころより長崎医学再興の議が起り、政府の補助（三年間）を受けることを決定。

九年（一八七六）

3月28日、長崎県令宮川房之、長崎病院内に医学場を設立することを示達（乙第七八号達）。

6月9日、長崎県より各区々戸長に宛て、撰択生の届出を示達。同月13日、吉田健康を医学場長に任ず。



〃 10 年（一八七七）

6月20日、長崎病院医学場、開場。  
8月12日、京都司薬場廃止に伴ない、横浜・長崎に司薬場を設置、Johann Frederik Eijkman  
を長崎司薬場試薬監督に任ず。

2月2日、鹿児島に起った西南の役に当り、長崎病院を仮りに傷病兵収容所とする。

3月15日、大浦外国人居留地に海軍仮病院設立。

5月27日、虎列刺病予防心得制定。

9月15日、長崎避病院設立。

12月10日、長崎病院医学場を長崎鑒学校と改称許可。

〃 11 年（一八七八）

1月8日、長崎鑒学校と改称、規則改正。校長兼院長、吉田健康。

同月20日、長崎鑒学校を県立とする。翌日、公立病院制の整備を達示。

4月、大徳寺跡に長崎病院の新築工事を起工。設計、Leeuwen.

12月27日、地方衛生令公布。

〃 13 年（一八八〇）

2月28日、長崎県衛生課（初代）課長に吉田健康を兼任。

6月、Leeuwen の後任 Cornelius Hendricus Mathews Fock を雇ふ。

8月、大徳寺跡の長崎病院新築工事竣工。

9月25日、長崎鑒学校学則改正。

同月27日、教育令公布。

12月27日、梅毒病院の設立はじまる。

〃 14 年（一八八一）

3月10日、長崎鑒学校教則改正。

〃 15 年（一八八二）

7月5日、長崎鑒学校獣医学部設立（長崎県甲第一三七号）。

〃 16 年（一八八三）

5月27日、医学学校通則制定。長崎鑒学校は甲種長崎医学学校となる。

9月30日、長崎県長崎医学学校規則改正。

〃 16 年（一八八三）

2月3日、同月16日、長崎県は長崎医学学校獣医学部及び獣医に関する論達を発す。

長崎医学略年表

- 3月12日、Sharko Weibenga Beukema を医学士代用として雇う。  
 4月16日、長崎医学学校規則改定。  
 6月22日、長崎医学学校獣医学部を一時廃止。  
 10月23日、医術開業試験規則公布。  
 3月18日、長崎医学学校卒業生は前年公布の医師免許規則に従うこととなる。  
 8月18日、長崎医学学校における囚人屍体解剖許可。  
 この年及び翌年にかけて、コレラ流行、又、教員増聘し、校舎増築、書籍・器械等購入などを行ない、医学学校を整備。  
 8月13日、清国水兵暴動事件あり、負傷者を長崎病院に収容、その後、山根正次、法医学確立に尽力。
- 19年（一八八六）  
 1月31日、長崎医学学校生徒心得及び寄宿舎規則を改正。  
 4月15日、第五高等中学校を熊本に置く。  
 5月5日、長崎医学学校獣医部規則制定。同月19日、博愛会は日本赤十字社と改称。  
 8月8日、第五高等中学校（第一回）設立相談会を熊本に開く。  
 同月27日、第五高等中学校医学部を長崎に置くことが決定。その後、第五高等中学校医学部敷地を浦上と定める。
- 20年（一八八七）  
 9月30日、地方税より甲乙丙種医学学校費を支弁することを廃止（明治21年3月限り）。  
 1月6日、Beukema の後任 Charles Arthur Arnold を雇ふ。  
 2月24日、日本赤十字長崎県委員部設立。  
 3月23日、長崎医学学校長吉田健康を第五高等中学校教諭に任じ、医学部長に命ず。旧長崎医学学校の書籍・器械及び校舎を以て、仮りに第五高等中学校医学部に充てる。  
 4月6日、長崎獣医学学校を商業学校内に移す。  
 4月10日、九州各地区の旧医学学校生徒、三六九人を転入せしめ、仮りに開校式を挙行。同月16日
- 21年（一八八八）

より授業開始。

7月、高等中学校の学科を一部・二部・三部に分け、各生徒をしてその一つを修めしめる。

9月11日、第一回入学式挙行。

10月12日、旧県立医学校より転学した者に限り、本部既定の学期に關せず、22年4月以後、旧医学校在学中の年数に応じ、卒業試験を行なうこととし、同月14日、開校式を挙行。

11月20日より19日までの通常長崎県会で Arnold の後任 Charles Edmond Amnat を雇入れることを決める。

11月26日、第1回卒業証書授与式。

6月18日、文部省告示、第七号により薬学科を附設、生徒定員四〇〇人を五〇〇人とする。

9月11日、長崎県西彼杵郡浦上山里村の新校舎に移り、在来の医学校を分教場とし、四学年生の臨床講義場に充てる。

11月1日、寄宿舎（習学寮）を開き、二年生以下をすべて入学せしめる。

3月7日、新築落成式を挙行。

5月31日、Amnat 病歿。

10月、医学部長を医学部主事と改称。

11月30日、裁判医学を法医学と改め、英語を外国語（随意科）とする。

9月11日、勅令及び文部省令を以て第五高等中学校を第五高等学校と改称。

5月、医学部卒業生を得業士と称せしめる。

2月27日、衛生委員を設置、職務章程を定める。

5月31日、医学科に細菌学を加う。

9月3日、吉田健康、卒去。同月11日、栗本東明を主事心得とし、同日、大谷周庵を医学部主事に命ず。

2月2日、大谷周庵、主事を免ぜられ、村上安藏を主事に任ず。

長崎医学略年表

明治 32 年（一八九九）

11月1日、閲覧細則を定め、閲覧室を開く。

5月23日、生徒の服制改正。

8月25日、田代正、村上安蔵に代り、本学部主事に任ず。

この年、長崎病院の建設、最も進捗する。

33 年（一九〇〇）  
34 年（一九〇一）

2月11日、薬学科教室新築工事成る。

3月31日、勅令及び文部省令を以て長崎医学専門学校と改称。又、官職中、校長1人、教授13人、助教授7人、書記5人と定め、第五高等学校より分立する。

4月1日、田代正を校長心得に任じ、6月5日、田代正を校長兼教授に任ず。

9月、長崎医学専門学校規則制定。同月11日、生徒の制帽を改める。

35 年（一九〇二）

4月、長崎病院開院式を举行。

36 年（一九〇三）

3月27日、専門学校令公布。

37 年（一九〇四）

2月10日、日露戦争起る。

38 年（一九〇五）

11月24日、県立長崎病院養成看護婦第一回卒業式举行。

39 年（一九〇六）

9月1日、日露戦争終結。

40 年（一九〇七）

4月16日、長崎県医師会再整備。

41 年（一九〇八）

5月1日、医師法、歯科医師法公布。

4月10日、官立医学専門学校規定を定め、後に生徒監を置き、教授定員16名となる。4月22日、エジンバラ大学教授シンブソン等、細菌学教室にて講演。

この年、長崎病院では、小児科、精神科が内科より分立。

3月30日、勅令第六九号により、本校教授の定員は一七人に、助教授定員は八人となる。

10月9日、在オランダの Ponde 病歿。

11月、本年以後の卒業生は、修了科に従い、本校名を冠し、医学士、薬学士と称し得ることとする。

42 年（一九〇九）

1月9日、文部大臣小松原英太郎の風紀肅清などに関する訓示に基き、同月13日、校長田代正は学校の風紀、生徒の品位向上について訓した。

3月24日、長崎県諭達、第二号により、癩病予防及び撲滅を示達。

11月22日、文部大臣小松原英太郎、来校。

43 年（一九一〇）

3月、勅令第六七号により、本校の教授定員は一八人に、助教授定員は五人になった。

44 年（一九一一）

4月4日、外国人特別入学規定を改め、台湾人、朝鮮人にも準用した。  
この年、雲仙県営公園設立さる。

45 年（一九一二）

5月、勅令第一三〇号により、本校の教授定員は一九人となった。

大正  
1 年

9月、医化学を生理学より分立せしむ。

2 年（一九一三）

11月28日、長崎県病院精神病室が落成し、診療をはじめる。

3 年（一九一四）

11月5日、教授青木大勇は長崎病院医事集談会をはじめる。

4 年（一九一五）

5月15日、長崎病院医事集談会と長崎医学会が合併し、新たに、長崎医学会会則を定め、6月5日、その第一回を開く。

5 年（一九一六）

6月、学年を変更し、開始期を4月、修了期を3月とした。

6 年（一九一七）

5月10日、文部大臣高田早苗が来校した。

7 年（一九一八）

5月10日、校長田代正、願により本官を免ぜられ、教授村上安蔵、校長事務取扱となる。

8 年（一九一九）

12月3日、校長事務取扱村上安蔵、願により本官を免ぜられ、尾中守三、本校教授兼校長事務取扱を任せらる。

9 年（一九二〇）

1月8日、小児科学教室設立。

10 年（一九二一）

12月6日、大学令を公布。

11 年（一九二二）

1月18日、第一次世界大戦終結バリ講和会議。

12 年（一九二三）

12月24日、校長事務取扱尾中守三は校長に任せらる。

13 年（一九二四）

4月16日、校長尾中守三、病歿、教授国友鼎、校長事務取扱となる。

長崎医学略年表

大正 10 年（一九二一）

11 年（一九二二）

8 月 12 日、山田基、本校校長兼教授に任ぜられ、国友鼎、兼官を解かる。  
5 月 9 日、外国人及び植民地入学生取扱が達せらる。  
3 月 31 日、習学寮を閉鎖し、勅令第一四二号により、文部省直轄学校官制中、官立医科大学官制を改正し、本校に附属病院を置かる。

4 月 1 日、元県立長崎病院の敷地建物及び器具機械その他、一切の設備を長崎県より国に寄附し、これを本校に交附。よって、同日より本校附属医院と改称し、一般診療に従事す。（初代院長、教授清水由隆）

12 年（一九二三）

3 月 30 日、勅令第九三号により、長崎医学専門学校を廃止、長崎医科大学（千葉及び金沢と共に）を設置し、附属医学専門部及び薬学専門部を置くこと定められる。又、同日、勅令第九四号により、本職の定員を改正。

4 月 1 日、長崎医科大学開設。附属医院及び附属医学専門部を併置す。山田基、長崎医科大学長兼教授に任ぜられ、附属医学専門部主事に補せらる。教授清水由隆は附属医院長に、教授林郁彦は学生監に、又、附属薬学専門部教授加藤静雄は薬学専門部主事に補せらる。  
同日、長崎医科大学学則制定。

4 月 18 日、大学の第一回受験生一二名に第一次入学を許可し、27 日、医学専門部在学生中の受験者一〇名に第二次入学を許可す。同月 23 日、教授開始。

5 月 1 日、鎌田文部大臣、来学。

8 月 8 日、附属医院助産婦及び看護養成所規則を改正。

13 年（一九二四）

5 月 20 日、教授国友鼎、学長山田基の海外出張中、学長事務代理兼、専門部主事代理を命ぜらる。  
6 月 9 日、本学学則第 3 章第 12 条但書を改む。10 月 29 日、学則第 2 章第 6 条改正。

この年、薬物学、生理学及び衛生学の各教室並びに産婦科手術室・外科手術室の増改築竣工。

14 年（一九二五）

1 月 24 日、学長山田基帰朝。国友鼎、兼任を解かる。  
3 月 31 日、附属薬学専門部規則を改正、又、本学学則中、授業料の項を改める。

◇ 15 年（一九二六）

4月1日、勅令第七九号により、官立医科大学官制中、第19条、附属医学専門部を削除される。  
 5月5日、清水由隆、附属医附長を辞し、小室要、後任。  
 7月1日、学長兼教授山田基、退官し、教授林郁彦、後任学長。  
 この年、病理学教室の一部、法医学教室、附属医院レントゲン室、精神科病棟及び調理所その他、屍室、門衛所などの増改築成る。又、長崎市小島町一番戸、本学所有地一五七二坪九勺を長崎市有地、長崎市梁瀬町八番地の一、三九坪九合五勺及び附属医院隣接地、二六一三坪四合四勺と交換。

昭和 2 年（一九二七）

◇ 3 年（一九二八）

3月31日、元陸軍射撃場一〇〇七五坪一合を長崎医科大学射撃場として大蔵省より購入。  
 4月1日、長崎市小島町一番戸所在、元養生所附属建物二階家一棟を本学構内に移す。  
 4月15日、附属医院長小室要、外国出張中、望月成人は院長事務取扱を命ぜらる。  
 9月9日、附属薬学専門部規則を改正。（12月25日、昭和改元）  
 この年、附属医院小児科病棟、医科大学本館及び附属建物、大講堂並びに附属図書館、薬物学講義室及び準備室、附属医院看護婦寄宿舎、学生控所などの新築、移築を竣る。  
 3月3日、学則第6条を削除、以下の条項を繰上げ、試験制度の一部及び学科時間配当表を改正。  
 3月25日、第1回卒業生19名に卒業証書授与。  
 4月1日、教授小室要、附属医院長を辞し、教授望月成人、後任。  
 10月31日、望月成人、院長を辞し、浅沼武夫、後任。  
 12月14日、附属薬学専門部主事川上登喜二、主事を辞し、高島清、後任。同月27日、学長林郁彦の海外出張中、浅沼武夫は学長事務代理となる。  
 この年、医化学教室附属薬品倉庫及び附属薬学専門部東側の防火壁が竣工、又、構内に消火専用水道を布設。北部隣接地民有地七八九一坪二合五勺を運動場並びに薬草園用地として購入。（12月4日、運動場の竣工式を行なう。）附属医院眼科病棟及び機関室等の増改築成る。  
 7月3日、学長林郁彦、帰朝（6月30日）につき、浅沼武夫、学長事務代理を免ぜられる。

長崎医学略年表

昭和 4 年（一九二九）

10月29日、勅令第二五五号により、学生監を廃し、専任学生主事（補）を置く。  
11月4日、創立記念式を行なう。

12月20日、大倉東一、附属薬学専門部主事になる。

この年、細菌学実験室、医化学実習室、研究室、附属医院皮膚科泌尿器科病棟、結核病棟などの新築成る。

4月12日、西彼杵郡野母村より本学臨海実験所用地一八一〇坪並びに建物五三坪を寄附。（文部大臣の認可）

同月30日、浅沼武夫、院長を辞し、古屋野宏平、後任。又、同日、文部次官通牒により、外国人特別入学規程を改正。

12月15日、野母臨海実験所落成式。

この年、解剖学教室附属動物室、附属薬学専門部温室、附属医院産婦人科病棟及び伝染病棟等新築。

5 年（一九三〇）

7月18日、大暴風雨により、本学会議室その他、多くの建物破損。  
この年、細菌学研究室、解剖学教室附属骨晒室、薬物学教室附属蛙池、附属医院内臨床講義室、外科病棟その他、婦人科、眼科、小児科、精神科、高南、高北の各病棟を連絡する渡廊下などの新築成る。

6月、配電室、構内配線工事、衛生学教室所属実習室及び研究室、附属図書館事務室、附属医院外科病棟、耳鼻咽喉科病棟、給水装置などの新築、増改築など竣り、西二病棟のうち一部を産婦人科病棟及びラジウム室に移転。又、法医学教室所属実習室（11月）及び野母臨海実験所（12月）などの復旧工事竣る。

4月1日、附属医院長古屋野宏平、院長を辞し、勝矢信司、後任。附属薬学専門部主事高島清、主事を辞し、川上登喜二、後任。

4月10日、学則中、薬物学を薬理学に改める。

7 年（一九三二）

6 年（一九三一）



◇ 8 年（一九三三）

11月2日、文官普通分限委員を置く。  
12月27日、勅令第三九二号により、助教授、助手、書記、薬剤手、看護長の項を改める。  
この年、附属医院小児科日光浴室、内科病棟竣工。学生控室復旧工事成る。  
又、解剖学組織実習室増築、内科診療所附属便所、渡廊下の移築竣る。  
3月25日、学長林郁彦、学長を辞し、小室要、後任。  
12月22日、院長勝矢信司、休職。高瀬清、院長事務取扱。同月27日、附属医院産婆看護婦養成所規則を改正。

◇ 9 年（一九三四）

この年、臨床講義室、内科病棟の残部、中央廊下、病理学教室研究室及び材料保存室並びに附属小使室、便所などの移築成る。  
2月24日、学長小室要、学長を辞し、高山正雄、後任。  
3月8日、高瀬清、附属医院院長。  
4月1日、長崎医科大学専攻生規定を制定（10月31日、改正）。  
10月12日、附属薬学専門部規則を改め、翌10年4月1日施行。  
同月22日、附属医院諸料金規定を定める。

この年、生理学教室講義室、銃器庫、事務官舎、附属医院整形外科病棟、臨床講義室、中央廊下の一室、耳鼻咽喉科病棟、渡廊下、第一機関室附属煙突一基など新築竣り、精神科診療室、同廊下の移築終る。又、解剖学実習室、馬車及び自動車兼用埋込秤及び同上家屋を新築。

◇ 10 年（一九三五）

1月21日、学則第35条を改め、同月23日、附属医院産婆看護婦養成所規則第21条を改正。  
2月15日、勅令第一七号により、附属薬学専門部の教授定員を一名増加。  
3月26日、附属薬学専門部規則第3条及び第4条を改める（学科目及び授業時間と臨時講演及び実習に関する分）。  
7月1日、以後、二ヶ月間、雲仙国立公園の滞在外人に対し、臨時的診療研究をなす目的で、夏季雲仙診療施設を創める（戦時中まで実施）。

長崎医学略年表

昭和 11 年（一九三六）

この年、医院塵芥汚焼却炉及び同上家、暖房汽罐室、汽罐一基、薬局休憩室、薬庫及び石油庫、倉庫、門衛所、自動車置場などの新築、増築、移築のほか、附属医院旧館の一部を医化学教室実験室の各附属渡廊下、附属薬学専門部実験室、医院学生控所、北講堂側昇降口受付及び本部物置などの模様替移築、附属図書館書庫及び同附属渡廊下、大学塵芥汚物焼却炉及び同上家などの新築竣工。

2月3日、附属医院産婆看護婦養成所規則第11条を改め、物理的療法大意を加う。

3月31日、附属医院長高瀬清、院長を辞し、角尾晋、後任。又、附属薬学専門部主事川上登喜二、主事を辞し、大倉東一、後任。

5月31日、学生証を交付。

6月23日、西彼杵郡時津村より、本学艇庫用建物五一坪寄付、同用地一六三坪の借入を文部大臣許可。

7月4日、学長高山正雄、九州帝国大学総長に転出し、角尾晋、学長となり、附属医院長を辞任。影浦尚視、後任医院長となる。

この年、附属医院本館、整形外科病棟の昇降機室、同出入場及び洗濯室、木金工場、動物手術室、精神科温室、大学自動車庫、医化学講義室及び準備室、同附属渡廊下など新築、模様替竣る。

3月19日、附属医院諸料金規定を改め、賄料を入院料に包含せしむ（4月1日実施）。

5月21日、官立医科大学官制第21条により、国友鼎を本学名誉教授とする。

この年、前年5月4日、焼失した解剖学研究室火室附属渡廊下、解剖学研究材料保存室などの復旧新築、附属医院本館、サイレン装置及び非常電鈴装置、運動場脱衣所などの新築、増築竣る。

3月29日、学則中、学科目及び試験制度を改め、附属薬学専門部規則中、学期間及び試験期を改正。

同月31日、附属医院長影浦尚視、院長を辞し、林雄造、後任。同日、学長官舎新築竣り、同敷地を財団法人長崎医科大学輔仁会より借入れる。

12 年（一九三七）

13 年（一九三八）

◇ 14 年（一九三九）

この年、野母臨海実験所水槽、附属医院本館増築、洗濯室、消毒室、看護婦寄宿舎、皮膚科特別診察室、細菌学教室講義室及び準備室などの新築、移築模様替を竣る。

1月24日、学則中、入学入学志願資格者の試験制度を改め、附属医院産婆看護婦養成所規則第10条の学期及び第11条の授業時数配当表を改正。

3月31日、附属薬学専門部主事大倉東一、主事を辞し、植田高三、後任。

4月18日、輔仁会よりの附属医院施設として隣接地二〇坪寄附受領を文部大臣、認可。

5月13日、勅令第三一五号により、臨時附属医学専門部を設置、同月15日、臨時附属医学専門部学則を制定し、角尾晋は同部主事となる。

この年、附属薬学専門部薬品庫の新築成る。

◇ 15 年（一九四〇）

1月、学則中、選抜試験制定を改める。

4月1日、附属医院長林雄造、院長を辞し、北村包彦、後任。

同月16日、勅令第二七八号により、臨時附属医学専門部官制を改め、職員定員表を制定。主事その他、教授及び書記各々二名を置く。

12月1日、附属医院諸料金規定中、入院料額を改める。同月6日、勅令第八五九号により、教授、書記の項を改める。

◇

16 年（一九四一）

この年、旧銃器庫を取毀し、附属薬学専門部生徒控室二〇坪の新築、本館二〇坪の増築の他、病理学教室附属動物実験室、渡廊下、衛生学教室附属動物室などの新築、移築を竣る。

3月26日、学則中、医化学を生化学に、医化学実習を生化学実習に改める。同月28日、新体制に伴ない、修練組織を強化し、従来の大学校友会及び附属薬学専門部校友会を改組し、長崎医科大学、同附属薬学専門部、同臨時附属医学専門部の全職員及び学生・生徒を団員とした長崎医科大学報国団を結成。

4月23日、前記、報国団の結成式を挙行。同月28日、勅令第五一一号により、臨時附属医学専門部職員制及び職員定員表を改める。

長崎医学略年表

この月、臨時附属医学専門部の解剖実験室、同部講堂など新築竣る。  
7月26日、元教授清水由隆、本学名誉教授となる。

9月、文部省通牒により、報国隊を組織し、同月18日、満洲事変勃発記念日にその結成式を挙行。  
11月1日、勅令第九二四号により、大学学部などの在学年限又は修業年限を臨時短縮せしめ、昭和16年度卒業生より学部及び附属薬学専門部とも、それぞれ三ヶ月短縮（卒業式は12月28日に行う）。又、昭和17年度には学部、附属薬学専門部、臨時附属医学専門部は、それぞれ六ヶ月短縮、いずれも9月中に卒業することとし、学部学生は、当年度に限り、春季及び秋季の二回、募集することとする。

12月8日、日本、アメリカに宣戦布告。

昭和17年（一九四二）

3月20日、勅令第一八二号により官立医科大学官制中、第22条の2を追加し、本学に、東亜風土病研究所（前名は大陸医学研究所）を附属し、職員定員表を改める。

同月31日、附属薬学専門部主事植田高三、主事を辞し、江口虎三郎、後任。

4月1日、附属医院長北村包彦、院長を辞し、長谷川高敏、後任。

5月1日、勅令第四六七号により、臨時附属医学専門部職員定員を改める。

同月4日、学長角尾晋、東亜風土病研究所長を兼ねる。

11月1日、勅令第七四九号により、職員定員中、書記の項を改める。

この年、臨時附属医学専門部臨時講義室、同生徒控所、結核病室など竣工。

18年（一九四三）

1月30日、勅令第五三三号により、職員定員中、技手二名を一名とし、看護長一二名を一名に減員。

7月27日、勅令第六一四号により、臨時附属医学専門部職員の定員を改正。

19年（一九四四）

3月31日、勅令第二〇〇号により、専門部主事を部長と改称。又、昭和15年の勅令第二七八号改正の臨時附属医学専門部官制中、「臨時附属医学専門部」を「臨時ニ附属医学専門部」と改め、主事を部長とする。

20 年（一九四五）

主事を部同日、附属医院長長谷川高敏、院長を辞し、内藤勝利、後任。又、臨時附属医学専門部主事角尾晋、部長を辞し、高木純五郎、後任。

4月1日、臨時附属医学専門部主事高木純五郎、附属医学専門部部长となり、附属薬学専門部主事江口虎三郎、附属薬学専門部部长に補せられる。

12月19日、勅令第六六八号により、職員定員表中、助教授、助手の項を改める。

6月、勅令第三七二号により、官立医科大学官制を改め、附属医院産婆看護婦養成所を厚生女学部と改称。

8月1日、附属医院外科手術室などに直撃弾投下、死者三名。

同月9日、原子爆弾投下され、長崎医科大学、附属医院、附属薬学専門部、附属医学専門部、東亜風土病研究所、厚生女学部、看護婦寄宿舎など、一切の建物、書類、簿冊、機械、器具類、その他の施設など倒壊、炎上、学長角尾晋以下、教職員、学生、生徒、八百五十余名、患者もともに被災。即死のほか、漸次、原爆疾状を起し、死亡するもの多し。

8月10日、ポツダム宣言受諾。同月15日、日本、無条件降伏。

同月22日、学長角尾晋、死亡。

この月、古屋野宏平は学長事務取扱に、調来助は附属医院長となる。又、一時、大学本部、附属医院を長崎商工会議所内に置き、長崎市興善町、新興善国民学校校舎を仮收容所として、患者診療を開始。

9月4日、久松待従等、来学、大学の復興を激励。同月下旬、長崎経済専門学校校舎内に大学本部、附属医院の事務部を移転。又、教官、学生等、数十名は大村元海軍病院に参集し、後事を議し、同月27日より入院患者の診療に従事。

10月5日より外来診療を開始、同月9日より授業を再開。

11月2日、大学合同慰霊祭。

11月上旬、大学本部を新興善国民学校に移し、医師会に代り、大学、附属医院により診療を行う。

長崎医学略年表

昭和 21 年（一九四六）

12月22日、古屋野宏平、学長に任ぜられる。

3月以後、原子爆弾により死亡した教授の後任が決定し、着任。

4月1日、勅令第二〇六号により、風土病研究所（旧東亜風土病研究所）を設置。

4月、諫早市永昌町、元佐世保海軍病院諫早分院を長崎医科大学附属第二医院とし、大学本部、附属医院、附属医学専門部、附属図書館、厚生女学部などを諫早に移転、又、5月には、元大村海軍病院における講義、診療を中止し、諫早に移る。（新興善国民学校内の附属医院を附属第一医院、諫早のそれを附属第二医院と称する。）

9月より浦上の旧附属医院焼跡を整理しはじめる。

当年度中、調理所、伝染病棟（計四六〇坪）を応急補修し、学生寮に充て、学生を収容、外来本館の一部を補修工事する。

昭和 22 年（一九四七）

3月31日、教育基本法、学校教育法の公布、4月より六・三・三制を実施。

5月3日、新憲法の発布。眼科病棟において祝賀会を举行。

同月14日、政令第四三号により、附属医学専門部を廃止、長崎高等学校を附置。

同月23日、学校教育法施行規則の公布。

9月、本部の一部（庶務課）、用度係の一部を浦上に移し、基礎医学教室を浦上の旧附属医院外来本館に復帰、10月25日、その復帰式を行なう。

11月12日、グビロケ丘慰霊碑除幕式を举行。

当年度中、浦上の附属医院外来本館（一一三七坪余）、中講堂、北講堂などを復旧補修工事する。

昭和 23 年（一九四八）

1月23日、学長古屋野宏平、学長を辞し、高瀬清、学長事務取扱。

9月、本部会計課を浦上に移す。

11月12日、大学創立九十周年、大学昇格二十五周年記念式を举行。

12月6日、学長事務取扱高瀬清、学長となる。

同月28日、附属医院長調来助、院長を辞し、広瀬金之助、後任。

24 年（一九四九）

当年度中、内科病棟（九五五坪）、皮膚科病棟（四二三坪）、眼科病棟（四三四坪）、小児科病棟（四四三坪余）などの復旧工事を竣了、看護婦寄宿舎（三七七坪）を新築。

5月27日、天皇陛下、臨校。内科病棟屋上より復興状況を視察される。

同月31日、法律第一五〇号により、国立学校設置法が公布され、本学は、学芸学部、経済学部、医学部、薬学部、水産学部の五学部より成る新制長崎大学として、同日、設置、長崎医科大学、同附属薬学専門部、長崎経済専門学校、長崎師範学校、長崎青年師範学校及び長崎高等学校の旧制学校を包括した。又、長崎大学には、風土病研究所を附置された。長崎医科大学長高瀬清は長崎大学医学部長を併任、附属薬学専門部長川上登喜二は薬学部長を併任。

6月1日、高瀬清、長崎大学学長事務取扱を命ぜられる。

6月22日、文部省令第二三号により附属医院は医学部附属病院と改称。

6月29日、高瀬清、太学学長事務取扱を免ぜられ、医科大学長を兼任のまま、長崎大学学長を命ぜられる。

7月1日、長崎大学本部の事務をはじめ。

同月29日、医学部長高瀬清、部長を辞し、影浦尚視、医学部長事務取扱を命ぜられる。

8月20日、大村一般教養部の入学式、22日、長崎一般教養部の入学式を行なう。（新制大学第一回）

8月31日、医学部長事務取扱影浦尚視、医学部長に補せられる。

11月1日、長崎大学開校式を経済学部において行なう。

当年度中、附属病院結核病棟（二五八坪余）、精神科病棟（三四七坪余）、汽罐場などの復旧補修工事を竣了。

1月5日、長崎大学学報を発刊。

3月2日、長崎高等学校、最後の卒業式を挙行、同月31日、同校廃止、高瀬清、同校校長の兼任を免ぜられ、同校教授森達雄、他五名は附属薬学専門部教授に配置替。

長崎医学略年表

4月1日、高瀬清、長崎医科大学長を辞し、影浦尚視、後任。又、長崎大学薬学部教授一番瀬尚及び同学部助教河野喜美彦等は、附属薬学専門部教授に併任を命ぜられ、一般教養課程関係の附属薬学専門部教授二名は学芸学部教授に、一名は経済学部助教教授に配置替となる。

5月1日、長崎大学学長高瀬清は大学大村分校主事を併任（一般教養課程を統合し、大村市に大村分校を設置）。

9月13日、医学部事務部は、浦上の旧内科病棟から用地の旧整形外科病棟へ移転。

10月2日より6日までの間に、附属病院事務部及び臨床各教室（附属病院各科）は、昭和20年秋以来、仮寓していた長崎市興善町一五番地、新興善小学校校舎より浦上の坂本町九三番地、旧長崎医科大学附属医院の一部補修の完了を機として全科の病室も入院患者のみ収容することとし、移転、復帰した（2日より移転をはじめ、6日に完了）。従って、興善町一五番地には附属病院外来診療所のみを残すことになったが、長崎大学本部は同月20日にこの興善町の附属病院内の一部に移転した。

11月7日、長崎大学医学部設置認可申請に対する医学部実地調査が実施された。（佐々木、米魚川、小池三委員及び小島事務官）

12月31日、附属病院長広瀬金之助、院長を辞し、和泉成之、後任。

当年度中、整形外科病棟（四五七坪余）、外科病棟（八三七坪余）、産婦人科病棟（四四一坪余）などの復旧補修工事を竣る。

2月16日、頼尊豊治、附属図書館長医学部分館長に補せられる。

3月2日、附属薬学専門部（旧制）最後の卒業式（1日には長崎師範学校、2日は前記のもの他に長崎経済専門学校、8日には長崎青年師範学校など、長崎大学の包括した旧制四校がそれぞれ最後の卒業式を挙る）。

同月27日、医学部専門課程の選抜入学試験施行。

同月31日、法律第八四号、国立学校設置法の一部改正により、長崎大学包括四校を廃止する（長



27 年（一九五二）

崎師範学校、長崎経済専門学校、長崎医科大学附属薬学専門部、長崎青年師範学校。附属厚生女学部主事三谷靖、主事を辞任。又、附属薬学専門部長川上登喜二、部長兼補を免ぜられる。

4月1日、諫早にあった附属第二医院は医学部附属病院諫早分院と改称、和泉成之は同分院長に兼補、又、三谷靖は附属看護学校長に就任（附属厚生女学部は同日より附属看護学校と改称）。

5月7日、附属看護学校校長三谷靖、校長を辞し、後藤敏郎、後任。

10月1日、医学部長兼長崎医科大学長影浦尚視、部長兼学長を辞し、和泉成之、後任。附属病院長兼諫早分院長和泉成之、病院長兼分院長を辞し、三谷靖、後任。

12月25日、長崎大学本部は、長崎市興善町一五番地より同町三五番地へ移転、同月27日、附属病院外来診療所も、本部の裏地に移り、新興善小学校は旧校舎（興善町一五番地、旧新興善国民学校校舎）に復帰した。

当年度中、看護婦宿舍（二〇九坪余）及び附属病院附属建物等の新営工事を竣える。

4月1日、長崎医科大学各教授は長崎大学医学部教授に兼補。

6月6日、長崎大学長兼大村分校主事高瀬清、願により免官、学芸学部長池田晋吾、学長兼大村分校主事事務取扱を命ぜられる。

7月1日、山田マツエを文部技官に任命、附属病院看護婦長に任ず。

同月14日、基礎医学教室の一部竣工により、医学部事務部の一部、部長室、事務長室、庶務係、会計係を新校舎に移転。

8月15日、教授松岡茂（日本学術会議ICSU研究連絡委員）、原子爆弾による人脳の変化及び神経病理学の諸問題について、連絡打合せのため、イタリア・アメリカ両国に出張を命ぜられる（9月6日より10月13日まで）。

10月13日、国立学校設置法施行規則の一部改正により、本学の定員一一三九名となる。

11月6日、教授佐藤純一郎、台湾猿の解剖学研究のため、中華民國へ出張を命ぜられる（12月1日より翌年3月31日まで）。

長崎医学略年表

昭和 28 年（一九五三）

11月18日、大学長兼大村分校主事務取扱池田晋吾、学長兼分校長を辞し、元長崎医科大学長、前佐世保市民病院院長古屋野宏平、文部教官に採用せられ、長崎大学長兼大村分校長主事に補せられる。又、古屋野宏平、長崎大学商業短期大学長を併任。

12月31日、附属病院長三谷靖、院長を辞任。

当年度中、基礎医学教室第一棟の一部（三三一坪余）、附属病院中央廊下（五三三坪余）の新営工事を竣り、精神科病棟にエスカレーター取付工事などを竣る。

1月1日、辻村秀夫、附属病院長兼諫早分院長を兼任。

3月10日、新制長崎大学第一回卒業式。

同月26日、国立学校設置法の一部改正により北海道大学など一二校に大学院設置。

同月31日、医学部長兼長崎医科大学長和泉成之、部長兼医科大学長を辞任。

4月1日、省令第九号、学位規則を制定。同日、北村精一、医学部長兼医科大学長を併任。

同月17日、長崎大学名誉教授授与規程を定める。同月30日、頼尊豊治、附属図書館医学部分館長を辞任。

5月1日、友永得郎、後任分館長となる。当月中、附属病院外来本館にあった基礎医学教室のうち、両生理学教室及び医学部事務部は新営第一棟に移転。

同月10日、北アメリカ、ミシガン長老教会より医学図書四六冊受贈。

6月1日、清水由隆、浅野金兵衛、平井金三郎、緒方大象、古屋野宏平、国友鼎、高瀬清（浅野金兵衛元長崎経済専門学校教授以外はすべて本学関係）に長崎大学名誉教授の称号を授与。

同月26日、長崎大学評議会規程を定める。

7月1日、長崎大学学部長選考基準を定める。

11月3日、教授北村精一及び風土病研究所助教授片峰大助のフィリアに関する業績に対し、第一二回西日本文化賞受賞。

1月1日、佐藤謙助、医科大学教授に任ぜられ、第二生理学教室開講。

同月6日、故田代規矩雄（大正七年、長崎医学専門学校卒、ロサンゼルスにおいて開業）より医学図書三〇二冊及び雑誌二四七六部を受贈。

1月31日、大学長兼大村分校主事古屋野宏平、分校主事を辞任。

2月1日、安中正哉、後任分校主事を併任。

3月6日、長崎医科大学第二九回（旧制最後）卒業式。

同月19日、教授等の停年に關する内規を定める。同月20日、名誉教授清水由隆、病歿。同月31日、医学部長兼医科大学長北村精一、附属病院長兼附属病院諫早分院長辻村秀夫、大村分校主事安中正哉、附属図書館長友永得郎、風土病研究所長登倉登、それぞれ併任を解除。

4月1日、相沢竜、長崎医科大学教授に任ぜられ、公衆衛生学教室開講。同日、北村精一は医学部長兼医科大学長に、辻村秀夫は附属病院長兼諫早分院長に、登倉登は風土病研究所長に、安中正哉は長崎大学分校主事（大村分校は長崎大学分校と改称）に、友永得郎は附属図書館長兼医学部分館長にそれぞれ併任。又、附属看護学校長後藤敏郎は一旦、併任を解かれ、同日、再び併任を命ぜられる。同日、長崎医科大学教授は殆んどすべて長崎大学（医学部）教授に配置替となり、医科大学教授を併任（任期日31年3月31日まで）となる。そのうち、登倉登、大森南三郎は長崎大学（風土病研究所）教授に配置替。

同月6日、第二四回日本衛生学会総会を活水女子短期大学において開催。

同月10日、大村分校は長崎市大橋町二〇〇番地に移転、長崎大学分校となる。同月26日、医学部基礎医学教室建設第二次工事竣工、検査を施行（第一棟、鉄筋コンクリート三階建、延九〇〇坪余が竣工、事務部、生理学第一、第二両教室があり、10月に生化学薬理学両教室が移転）。同月13日、日本医学放射線学会第一六回九州地方会を附属病院北講堂において開き、同月30日、第四回日本産婦人科学会九州地方会を三菱会館において開催。

6月15日、教授影浦尚視（内科第二教室）辞任し、長崎大学名誉教授の称号を授与。長崎大学教授会通則を定める。

長崎医学略年表

昭和30年（一九五五）

8月17日、文部省在外研究員となった教授中沢与四郎、薬理学特に賦形薬研究のため、三ヶ月間、北アメリカ、西ドイツ、フランスなどを視察のため出発。同日、東京大学名誉教授都築正男、広島ABCC研究所長ホームズ博士及び前所長カーネル博士と来学、医学部講堂において水爆傷害に関する講演を行なう。

10月24日、第四回日本衛生動物学会、第七回日本寄生虫学会の南日本支部大会を附属病院北講堂において開催。

11月26日、長崎大学教員選考基準を定める。同日、調米助、アメリカ政府の招請で渡米決定。（30年2月18日より6月21日まで）

同月27日、第三〇回長崎医学会総会を北講堂及び中講堂において開催。

1月1日、附属病院長兼諫早分院長辻村秀夫、病院長兼分院長を辞し、和泉成之、後任。

2月5日、原爆被害調査協議会を設く。

同月13日、医学部大学院設置について、東京学芸大学長木下一雄が来学、視察。

3月27日、助教授（内科第二）朝長正允、アメリカ政府の招請により、3ヶ月間、渡来。

4月1日、医学部長兼医科大学長北村精一、再選。同日、基礎医学教室第二棟の一部竣工し、細菌学、衛生学、公衆衛生学及び法医学教室を附属病院外来本館より移転。

同月11日、ドイツのノーベル賞受賞者（生化学）ブテナント博士が来学。

5月1日、附属看護学校校長後藤敏郎、校長を辞し、横田素一郎、後任。

7月1日、法律第四四号、国立学校設置法の一部改正、政令第一〇六号、政令の一部改正により、本学部に大学院を置かれ、長崎大学医学研究科と称することとなる。そして、医学部教授は大学院医学研究科課程を担当。又、国立学校設置法施行規則の一部を改正する省令（文部省令第一三三号）により、医学部に附属助産婦学校が設置される。同日、国立学校の講座に関する省令が定まる。

8月3日、文部省告示第八一号により、本学医学研究科に新たに置く専攻科名称及び課程は、生

31 年 (一九五六)

理系、病理系、社会医学系、内科系、外科系（各博士課程）とされる。  
同月9日、原爆犠牲者追徐会十周忌を举行、旧医科大学門柱の保存除幕式。同月31日、助教授岳中典男、イリノイ大学に薬理学及び食品化学研究のため渡米（一年間）。  
10月3日、日本学術会議、原爆調査研究班第七回会議を医学部会議室において開催。同月22日、第五回九州医師会医学会総会を長崎市において開催（会長、高尾克己）。  
同日、第七回西日本皮膚泌尿器科連合地方会、日本頤学会の第四回西部地方会を長崎大学経済学部において開く。

同月24日、長崎大学本部は、長崎市大橋町二〇〇番地に移転。

当年度中より基礎医学教室第三棟（約一〇〇〇坪）の新営工事開始。

2月1日、長崎大学分校主事安中正哉、主事再任。同月29日、附属図書館長兼医学部分館長友永得郎、図書館長の併任を辞す。

3月20日、附属看護学校第六回卒業式、附属助産婦学校第一回卒業式を举行。

4月3日、日本法医学会を開催。

7月20日、名誉教授緒方大象、病歿。

9月1日、風土病研究所長登倉登、所長再任。同月21日、国際遺伝学会出席のため来日中のブル1（生物学）、スターン（動物学）、ミュンチング（植物学）の三教授、来学。

10月12日、古屋野宏平、長崎大学長に再選（11月18日、任用更新）。

11月2日、薬学部創立六六周年記念行事を行なう。

同月3日、学長古屋野宏平、長崎日日新聞文化賞受賞。

1月1日、附属病院院長兼諫早分院長和泉成之、病院長兼分院長に再任。

同月14日、名誉教授国友鼎、病歿。

同月31日、教授佐藤純一郎、西ドイツ及び中華民国において解剖学研究のため渡欧（在外研究員として約一年間）。

32 年 (一九五七)

# 長崎医学略年表

4月1日、医学部長兼医科大学長北村精一、学部長兼医科大学長を併任（三選）。国立大学の講座に関する省令（昭和29年、文部省令、第二三三号）の一部改正により、本学部に医動物学の講座設置される。

5月1日、附属看護学校校長横田素一郎、校長を辞し、教授仁志川種雄、後任。

6月20日、助教授松田源治、在外研究員としてカリフォルニア工科大学に生化学研究のため渡米（約二年間）。

7月1日、教授三谷靖、附属助産婦学校長を併任。

同月25日、諫早市に水害あり、諫早分院、風土病研究所、大学官舎など殆んど全滅。

同月31日、諫早分院の診察を再開。

8月8日、文部大臣松永東、来崎し、諫早の風土病研究所、附属病院諫早分院の水害による被害状況を視察。

同月11日、教授佐藤謙助、フルブライト交換教授として十ヶ月間、ノースウエスタン大学で、生体における自己調節機能に関する研究を行なう。

11月12日、長崎大学医学部創立百年を記念し、西洋医学教育発祥百年記念会及び長崎大学医学部創立百周年記念会の式典その他を挙行。

補記。長崎医学略年表は、最初、松田源治助教授が担当されていたが、渡米のため、完成をみるに至らず、その後、小池博、西村敏雄両氏の加筆を以て、漸く形を整えた。そして、更に北村精一教授の監修を経て、編集部に廻されて来たが、頁の都合及び編集の立場から、稿を改めた。